

[課題演習抄録]

文学で多様な解釈を促す国語科授業研究

石 田 恵 理

Eri ISHIDA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：国語科，読むこと，多様な解釈

1 研究の目的

文部科学省(2018)によると，子どもの不読率は未だに改善されていない。不読率が高いということは，読解力(解釈力)の不足と，読むことの意義を感じていない学習者が多く存在することを示唆している。これらは，「多様な解釈」の経験によって解決できると考える。そのため，文学的文章の読みの分野で「多様な解釈を促す」ということに着目し，指導法を開発することを目的とする。

2 研究の計画

- (1) 解釈に関する先行研究の検討
- (2) 授業実践による授業方法の検討

3 研究の内容

- (1) 解釈に関する先行研究の検討

テキストの解釈において，難波(2008)は，コード解釈と推論解釈という2つの概念を示している。コード解釈は，日本語の音韻・文字・語彙・文法の各知識から解釈するものと述べている。つまり，テキストを直訳するように解釈することである。推論解釈は，自分自身の記憶の中から推論して解釈するものと述べている。つまり，コード解釈に加え，知識や経験を踏まえて解釈することである。

本研究の解釈に関する文言は，難波(2008)の概念規定に基づいて，これらと呼ぶことにする。

- (2) 授業実践による指導方法の検討

①授業概要

福岡県A中学校3年生を対象に，島崎藤村の「初恋」という詩を題材にして授業実践を行った。授業の流れは，原文を音読した後，詩の形式を確認

した。その後，口語訳を配り，「我と君は片思いなのか，両思いなのか」というテーマで，まずは，考えをワークシートに記入させ，それをもとに4人班で議論させた。その後，全体で，片思い派，両思い派の意見を発表させ，全体で議論し，多様な解釈を促した。

②口語訳の役割

本授業は，推論解釈を行い，それを他者と対話したり，議論したりする中で，多様な解釈を促すことを目的としていた。今回は，一時間完結の授業だったので，口語訳をするという，コード解釈の部分に時間を取らないために，口語訳を生徒に配り，推論解釈を促した。

ワークシートを見ると，生徒たちは，文語定型詩の原文ではなく，その口語訳を使って解釈を形成していた。そのため，文語定型詩の場合，口語訳を提示していなかったら，詩のコード解釈に力点が置かれ，議論は起きにくいのではないかと考えられる。そのため，今回の推論解釈の場合には，口語訳の提示は有効であったと考えられる。

しかし，口語訳を使って解釈を形成するからこそ，口語訳を吟味して提示することが必要である。授業の中で「たのしき恋の盃を君が情けに酌みしかな」の口語訳を「恋に酔いしれる楽しさをあなたの愛情で受け止めてくれた」と訳したものを提示すると，「愛情で受け止めているなら両思いだ」と根拠も主張も同じように解釈している両思い派の生徒が多く存在し，議論が活性化しなかった。しかし，他学級で同箇所の口語訳を「恋に酔いしれる楽しさをあなたのおかげで知ることができた」と訳したものを提示すると，さまざまな解釈が混在して，議論が活性化した。

これらのことは，最初の学級では，解釈が一つに絞られるような内容を提示してしまったために，解釈が偏ってしまったと考える。後の学級では，

いろんな考え方ができる口語訳を提示したため、知識や経験や価値観など、他者とのズレが生じることで議論が活性化し、多様な考えを生み出すことができたと考える。

以上のようなことから、解釈が一つに絞られるような教師の口語訳の提示では、解釈のズレが少ないために、多様な解釈を引き出すための議論が成立しにくいということが考えられる。そのため、解釈のズレを起こさせるような口語訳を提示することが、多様な解釈を促す際に必要だと考える。

③議論が成立する条件(表1参照)

全体での議論の際、両思い派の生徒Tの意見に対し、片思い派の生徒Nが反論したことから議論が始まった。そこから、S58やM17の発言の、両思い派の生徒から、片思い派である生徒Nへの質問に対して、生徒NはN56のような主張をした。それに対して、E28の発言は、強いため息をした場合の結果のことを聞いている。しかし、N57の発言では、ため息が強かったという主張をもう一度言った。すると、E29の発言は強いため息をする理由を聞いている。それに対し生徒Nは、N58のため息の具体的な強さのことを主張している。

以上のような生徒同士の対話から、生徒Nは、自分の解釈を主張することはできているが、上手く周りの人を説得できないでいる。これは、生徒Nが、解釈の根拠について説明することができていないからだと考える。それは、生徒Nの根拠の立て方として、知識や経験のみが示されているからであろう。そのため、生徒Nが、文章からも根拠にできるようになることで、他の生徒との議論が成立するのではないかと考える。以上のようなことから、文章を手掛かりにする解釈と、知識や経験を手掛かりにする解釈との折り合いをつけた解釈力が必要だと考える。

④文学で多様な解釈を促す意義

生徒たちの議論の中で、生徒Nの解釈について周りの生徒たちが、理由や結果や反論などを次々に発言する場面があった。これは、生徒Nのような、自分の主張は発言できるが、根拠を示すことが難しいような生徒がいることで、周りの生徒たちは、なんとか生徒Nを説得しようとして、引き込まれるように対話に参加していたのではないかと考えられる。もし生徒Nの意見が出なければ、この議論は活性化しなかっただろう。

今回、生徒Nがいることで、議論は活性化し、多様な解釈を生み出す場では大活躍だった。しかし、もし多様な解釈が認められず、コード解釈に近い「正解」を求める授業であったなら、生徒N

は活躍できただろうか。おそらく、コード解釈の得意な生徒だけが発言でき、それ以外の生徒は参加できなかっただろう。学級にいる生徒たちは能力や特性が一人一人違う。多様な解釈が認められる授業では全員が自信を持って自分の意見を発言することができ、授業の中で活躍できる。以上のようなことが、文学で多様な解釈を促す意義と言えるのではないだろうか。

⑤多様な解釈がもたらす影響

授業記録を見てみると、議論の中で、生徒Nが文章を根拠にする場面や、反対に周りの生徒が自らの知識や経験を語る場面があった。このことから、多様な解釈を生み出す議論の中で、お互いの強みを生かした、双方向の学びがあるのではないかと考える。以上のようなことから、多様な解釈を促すことで、目的で挙げたような不読率が示唆している2つの課題を克服することに繋がり、読書への抵抗感は軽減されるのではないかと考える。

表1 授業記録

S58:髪の毛にかかるほど近い距離やろ？
M17:やけん何でそんな近いん？
N56:お前らさ、ため息、「ふう…(小声)やと思っとるやろ？違うん、我のため息が、「ふんーっ！」やったんよ！」
E28:じゃあじゃあじゃあさ、このさ、近さでさ、「ふんーっ！」ってやられても
N57:やけ、やけ、俺の「ふんーっ！」より強かったんよ！
E29:何のために！！
N58:やけんものすごい、口の中に扇風機かけるくらいの…

4 成果と課題

本研究の成果として、3点挙げられる。それは、①推論解釈を行う場合の口語訳の提示は有効であったこと、②解釈のズレに焦点をあてて対話させることで議論が活性化すること、③多様な解釈を促す授業作りでは、生徒たちが対話や議論を行う中で自然と「学び合い」が行われ、主体的な授業を展開できるということである。

課題としては、多様な解釈を促すような授業づくりの基盤として、コード解釈の学習のあり方についても検討することが必要である。

主な引用・参考文献

- 文部科学省 2018 第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の概要
<https://www.kodomodokusyo.go.jp/happy/hourei.html>
難波博孝 2008 母語教育という思想 世界思想社